

古楽府「何嘗 艶歌何嘗行」（『宋書』巻21・楽志三）

何嘗快独無憂	どうして 愉快地に ただ憂いとは無縁に過ごせるだろうか
但当飲醇酒	もっぱら芳醇な酒を飲み
炙肥牛」	肥えた牛肉を炙ることだ 一解
長兄為二千石	一番上の兄は禄高二千石の高官で
中兄被貂裘」	中の兄は貂の皮衣を着る裕福な身分だ 二解
小弟雖無官爵	末の弟は 官爵を持たないとはいえ
鞍馬馭馭	鞍をつけた馬を颯爽と走らせて
往来王侯長者遊」	王侯や富貴の人々と交遊している 三解
但当在王侯殿上	ただ王侯の御殿の上で
快独携蒲六博	愉快地に 特に 携蒲や六博や
对坐弹碁」	対座して弾碁に打ち興ずるがよい 四解
男兒居世	男子はこの世にあって
各当努力	それぞれに努力しなければならない
蹙迫日暮	時はひたひたと迫って日は暮れて
殊不久留」	いまだかつて久しく留まったためしはないのだ 五解
少小相触抵	小さな頃からお互い身近に触れ合って
寒苦常相随	苦しい日々の中 いつも相連れ立っていた
忿恚安足諍	憤り恨んで どうして諍いを起こすほどのことがあろうか
吾中道与卿共別離	（だが）わたしは道半ばにしておまえと互いに離れてしまった
約身奉事君	心身を引き締めて（おまえは）君主にお仕えせよ
礼節不可虧	礼節には欠けるようなことがあってはならぬ
上慚滄浪之天	上は青青とした天に対して面目なく思い
下顧黄口小兒	下はひな鳥のような幼子を顧みる
奈何復老心皇皇	いかんせん また年老いてゆき 心はざわざわと不安に揺れる
独悲誰能知	ひとり悲しむ この気持ちを誰が分かってくれようか

「少小」下為趨曲、前為艶。 「少小」より下は趨曲、それより前は艶である。＊

＊増田清秀氏は、「趨」を呉歌、「艶」を楚歌と推定する。『楽府の歴史的な研究』（創文社、1975年）p.93—96を参照。

なお、「一解」から「五解」は、「艶」の歌曲としての区切り目を示す。